

「いつまでも若々しく生きる」ことの意味を考える(No. 1)

－少子高齢化社会における持続的経済発展のために－

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

Q 林さんは、「いつまでも若々しく生きる」という言葉が好きですね。

A (林 明夫。以下略)はい。「成功の実現」を著した中村天風(なかむらてんぷう)先生の著書の中に、「いつまでも若々しく生きる」があります。私は何回か拝読させて頂いて以来、著書の内容と同様に、「いつまでも若々しく生きる」という生きる上での基本的態度を極めて高く評価するようになりました。そして、OECD(経済開発協力機構)に加盟している日本をはじめとする国々のみならず、すべての国々にとって大切にすべき基本的な考えではないかと思うようになりました。

Q どういうことですか。

A 日本の財政は破綻(はたん)の危機にさらされています。郵政の民営化や効率の悪い特殊法人をはじめとする公共部門の民営化が早急に実現されないと、消費税を 20%以上にしても、年金負担額を現在の数倍にしても、日本の国家財政は破綻を免れないと予想すらされています。

本年 4 月にベルギーのブラッセルで開催された E C (欧州委員会)などが主催した「Employment Week 2005」という国際会議では、「いつまでたっても財政危機を脱却しないでいる日本のようにならないために、苦しくても改革を推し進めよう」との発言があり、賛同の大きな拍手が起こりました。約 1000 名の参加者中日本というよりアジアからただ一人参加した私は、日本を反面教師にしようと言われて、ヨーロッパの国々に負けてなるものか、それにしてもどうしたらいいのだろうかと考えました。そのとき頭をよぎったのは、「いつまでも若々しく生きる日本づくり」ということでした。

Q どういうことですか。

A 人間が長生きすることは素晴らしいことだと、私は考えます。人間の幸福とは何かといえば、長く生きることであると私は考えます。ただし、どのように生きるかも大きな問題です。そこで、私は、どうせ生きるなら「いつまでも若々しく生きる」ことを心掛けたらよいと考えます。

2. 納税者への負担が少ない生き方を心掛けよう。

Q 林さんがお考えになる「いつまでも若々しく生きる」とは、どのようなことですか。

A 国家や地方の財政が破綻の状況にあるのですから、病気の場合は別にして、一人ひとりが税金に頼らないように心掛けることが、「いつまでも若々しく生きる」の第一歩ではないかということです。

納税者の優しい心遣いの表れである無料の公共サービスをできるだけ受けずに、自分で支払いができるうちはその支払い分を多くすることが、「いつまでも若々しく生きる」第一歩であると思います。また、必要以上の税金の支出による無料に近い公共サービスを受けない生き方・生活の仕方を工夫し心掛けることが、「いつまでも若々しく生きる」ことの第一歩であると考えます。

さらに、自分にとって不必要な極めて高額な医療サービスを受けることを拒否する意思表示を予めしておくことも、「いつまでも若々しく生きる」ことの第一歩に入のではないかと思います。具体的には、「尊厳死」を選択することを予め主治医や親族に文書で伝えておくことであると思います。終末医療は極めて高額で、税金の負担が年間 1000 万円にも及ぶ場合があると伝え聞きます。意識が無くなり、回復不可能と医師が判断した場合には、しばらく時間をおいた上でそれ以上の治療を拒否する意思表示を予めしておくことは、「死に際のたしなみ」ではないかと考えます。

不必要な医療行為(検査や診療、投薬)は納税者に過度の負担を強いるものと考え、必要ない旨の意思表示をする知識や勇気を持つことも、「いつまでも若々しく生きる」上で大切であると考えます。

Q 「いつまでも若々しく生きる」ことは、ずいぶん大変なのですね。

A そんなに大変なことではないと考えます。「心掛け」「生き方」の問題です。例えば、公営バスが大赤字に苦しんでいる。1回 200 円の乗車料金を払える人は、年齢が何歳であろうと払ってはどうかというだけのことです。支払いが可能であるにもかかわらず無料パスを持っているからタダで乗らなければ損だとお考えになるのは、赤字に苦しむ自治体やそれを支える納税者に「気の毒」だと思いいなることも、「心掛け」「生き方」の選択肢の1つではないかと思います。

終末医療には、場合によっては 1000 万円近い費用が必要となります。税金によってそれが賄われているならば、意識があったり常識の範囲で回復の可能性が残っているのならともかく、意識が無くなり回復の可能性が極めて少ないと判断された場合には、しばらく時間をおいた後の治療はご遠慮しますという意思表示を、親族や弁護士、担当医師に予め書面で伝えておくことを以て「尊厳死」というのであれば、このような「心掛け」「生き方」をすることも、「いつまでも若々しく生きる」上では大切であると考えます。繰り返しになって恐縮です。

Q 現在や将来の納税者にかかる直接の負担を無理のない範囲でできるだけ少なくしようということが、「いつまでも若々しく生きる」ことの第一歩であるというお考えですね。

A はい。日本の国家財政、自治体財政が破綻の危機に瀕(ひん)していることは事実ですので、「心掛け」「生き方」として、無理のない範囲で税金の受給対象になることをできるだけ避けることを以て「いつまでも若々しく生きる」ことの第一歩としようということです。但し、あたりまえのことですが、病気の方はよくなるまで最高の医療を受けられるように、国民が力を合わせて保険制度を維持する。この点、誤解のないように付け加えます。

3. 60歳(65歳)を過ぎても、さらに20年間働いてみよう。

Q 少しずつ分かってきたような気がします。「いつまでも若々しく生きる」の次の一歩は何ですか。

A 60 歳から 80 歳まで(人によっては 65 歳から 85 歳まで)、所謂(いわゆる)定年を迎えてからさらに 20 年間、どのような形ででもいいから働き続けよう。これが「いつまでも若々しく生きる」の次の一歩です。

人にもよるでしょうが、何十年か前の 60 歳と今の 60 歳の方には大変な違いがあります。人によっては、心身ともに 30 台、40 台の元気さをお持ちの方も多いように感じられます。同様に、現代の 80 歳、85 歳の方の中にも、何十年か前の 50 台、60 台の元気さをお持ちの方も非常に多いような気がいたします。

いろいろな形で他人の役に立つ「生き方」を「心掛ける」ことは、「いつまでも若々しく生きる」ことを考える上で面白いと思います。

では、どのような形でお役に立つかといえ、それは一人ひとりの「心掛け」「生き方」の問題ですので、私には何とも言えません。もしできれば、何らかの仕事を持って働き、収入(所得)を得、税金を支払い、国や地方自治体を支える。また、これぞと思う社会的な活動を支えることも面白い生き方ではないかと考えます。

Q 若い人ですら仕事に就くことは難しいと言われているのに、60歳を過ぎてから20年もできる仕事など実際にあるのでしょうか。

A いくらでもあると思います。今の世の中に役に立つことは何かを考えれば、いくらでも仕事はあります。但し、仕事の内容はよくお選びになられることをお勧めします。無理強いされて嫌々ながらするような仕事ではなく、人生の総仕上げとしてこれだけはやり通したい、やり抜きたいという仕事をお選びになることをお勧めします。

本当をいうと、そのための準備期間を 50 台の 10 年間と考えることも大切なのです。60 歳を過ぎたらどんなことをしようかとワクワクしながら 50 台を過ごし、忙しいとは思いますが1週間のうち何時間かはその準備に充てることが大切なのではないのでしょうか。

Q 余り無理をしなくて、ということですね。

A 「生きる」「生き抜く」ということが大切であると考えますので、無理は禁物です。

Q 「生きる」「生き抜く」ですか。どう生きたら良いのでしょうか。

A 「よく生きる」「よく生き抜く」ことが、「いつまでも若々しく生きる」ことではないかと思います。何を以て「よさ」とするかは、お一人おひとりが何を以て「大切なもの」「大事なもの」とするかで異なると思います。自分の中にある大切なもの、大切にすることを「よさ」と考え、その「よさ」をもっとよくするような生き方が、「よく生きる」ことではないかと思います。大変かも知れませんが、それを一生続ける気概(きがい)を持ち続けることが、「よく生き抜く」ことではないかと思います。もう少し言うと、自分の生きる使命(ミッション)とは何かをお考えになり、その志(こころざし)を持続することが、「よく生きる」「よく生き抜く」ことにつながるのではないかと思います。

折角仕事をするのですから、60 台以降の方はそのような仕事を見い出す努力をすべきです。

また、一方で、今やっている、あるいはこれからやろうとしている仕事の中に「高い志」を見い出すことも大切です。同じ石を削るのに、誰かに頼まれたから仕方なく削るのと、その石が使われる大切な意味をよく理解しながら削るのとでは、その出来上がりに大きな差異が生じます。同じ仕事をしていても、よい汗をかき、すがすがしい気持ちで一日の仕事を終えることができます。その仕事の持つ「高い志」「全体の中での意味」をよく理解して、働く意義を実感することも、「いつまでも若々しく生きる」上で大切だと思います。

Q 最後に一言どうぞ。

A 世界で最も早く「超少子高齢化」を迎えた日本の持続的経済発展を実現するカギの1つが、「いつまでも若々しく生きる」日本を実現することではないかと考えます。

自分のためにもなり、社会のためにもなる、この「いつまでも若々しく生きる」をどう実現したらよいかを皆様とともに考えていきたいと希望いたします。

ー 2005 年 5 月 22 日、米国有数のシルバータウンのある
アリゾナ州フェニックス市にて記すー